

四万十市ふるさと応援団員からの便り

ふるさととは四万十川



笹山久三（芝久己）
神奈川県横浜市
昭和25年生まれ

私のふるさととは四万十川である。生まれて三才にも満たぬ頃までは津賀の里にいた。そして、藤の川、江川崎、津野川と暮らしを移すのだが、父母が津野川で商いを始め、川漁師にも手を染めて暮らしを確立していくには遠い日々の連続であつたらうと推測する。

家のすぐ近くには、庄屋さんの屋敷があつた。家主は京都にいるとかで、留守番のおじいさんが、守をしていた。話じょうずで、聞きじょうずなので、僕らはみんなで群れた。

母が店を開くために手に入れた家は、宙に浮かんでいた。谷川から道路の高さまで柱で持ち上げ、それを基礎に上階が店と暮らしの空間である。雨台風にも風台風にも弱いのだ。

風台風の時、父が笑顔を無くした状態で動いていた。そこに現れた庄屋のおじいさん。父に何かを告げ、庄屋の屋敷へ戻った。父とおじいさん二人が地面に杭を打ち、ロープで住宅を縛りに入つたのは、それから少ししてからだ。台風は強かった。私たちは庄屋の家に逃れて台風をやり過ごした。その屋敷は佐賀の乱の折、江藤新平の隠れ家でもあつたようだ。

その何年か後、我が家は台風に押しつぶされた。四万十川の氾濫と争い続けた我が家であるが、両親共に、四万十川を見下ろす位置に今は眠る。

2年程前高校の同窓会があり四万十川を訪ねた。開発はあるが、自然破壊とは言えない。過去が、自然の力で蘇っている。

四万十市、新しい都市だ。規模のことはともかく、心豊かな町を求めたい。